岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

翻訳：G.W.F.ヘーゲル『ハイデルベルク・エンチクロペディー 自然哲学』(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲生, 勝, 鈴木, 恒範 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/4439

翻訳：G.W.F.ヘーゲル『ハイデルベルク・エンチクロペディー　自然哲学』〔1〕

訳　稲生　勝・鈴木　恒範

（1998年5月8日受理）

Übersetzung ins Japanische : G.W.F.Hegel; Enzyklopädie der philososophischen Wissennschaften im Grundrisse,1817 B. Philospphie der Natur〔1〕

Masaru Inoo, Tsunenori Suzuki

本稿は、G.W.F.Hegel:Enzyklopädie der philososophischen Wissennschaften im Grundrisse, 1817（エンチクロペディー初版、いわゆるハイデルベルク・エンチクロペディー）のB. Philosophie der Naturの翻訳である。おそらくは、初めての日本語訳である。なお、テキストは、グロックナー版ヘーゲル全集第6巻（Georg Wilhelm Friedrich Hegel Samtliche Werke., hrsg. von Hermann Glockner, Band 6,1968）を用いた。稲生が下訳をつくり、鈴木が確認し、その後、二人で討議した。

予備概念

§192（§247）（かっこ内は、第3版の該当セクション、以下同じ）

自然は、他在の形式における理念として生じてきた。自然においては、理念は、自分自身の否定的なもの、あるいは、自己にとって外面的なものとして存在するのだから、自然は、ただ単にこの理念に対して相対的に外面的であるばかりでなく、外面性は、理念が自然として存在する規定をなしてもいるのである。

§193（§248）

この外面性において、概念の諸規定は、相互に無関心な存立と孤立化という仮象を有

する。それ故、概念は、内面的なものとして存在する。だから、自然は、その定在において自由を示さず、必然性と偶然性を示す。

それ故、自然は、自然がまさに自然である所以の規定された現存在からすれば、神化され得ない。さらに、太陽や月、動物、植物などを人間の行為や人間界の出来事より優先的に神の仕事として考えたり、持ち出したりすることは出来ない。－自然は、即自的には(an sich)、つまり、理念においては、神的であるが、しかし、理念においては、自然が自然であるゆえんの自然の規定された在り方が止揚されている。あるがままの自然では、自然の存在は、自然の概念に一致しない。それ故、自然の現存する現実性には、真理はない。自然の抽象的な本質は、古代人が物質一般を非有（non-ens）と把握したように否定的なものである。しかし、そのような要素においてではあるにしても、自然は、理念の叙述であるのだから、自然における神の英知を賛美する人もいるかもしれない。しかしながら、神の存在を認識するのには、麦藁一本で十分だとヴァニーニはいったが、精神のいかなる表象も、たとえ精神についての全くくだらない空想、全くもって気紛れな遊戯であっても、また、いかなる言葉も、なんらかの個別的な自然対象よりも優れた、神の存在の認識根拠である。自然においては、形式の遊戯は、その勝手な、抑制のない偶然性を有するばかりでなく、どんな形態もそれだけでは、形態自身の概念を欠いている。その定在における自然がそこへとかりたてられていく最高のものは、生命である。しかし、単なる自然の姿をした理念としては、生命は、外面性という没理性に委ねられており、個々の生命態は、現存在のいかなる契機においても自分にとって他者である個別性に囚われている。これに対して、どんな精神の外化にも自分自身との自由な普遍的な関係の契機が含まれている。－自然が、一般に理念の自分自身からの離反として規定されるのは正当である。なぜならば、自然は、外面性の要素において自分自身が自分に不釣合いであるという規定を持っているからである。－だから人間の制作する芸術作品が、その素材を外部から獲ってこなくてはならないからとか、それが生きていないからとかいって、自然の事物より劣っているとするなら、それは、次のような誤解である。－あたかも精神的な形式が、自然的な形式より高い生命性を持っておらず、自然的な形式より精神の価値がないかのように、また、あらゆる人倫的なもののうちで質料と呼ばれうるものがまったく精神にのみ属しているのでないかのように。－自然は、その現存在のあらゆる偶然性のもとで永遠の法則に忠実である。しかしながら、自己意識の領域も永遠の法則に忠実である。－それは、一つの摂理が人間界の出来事を導くという信仰において、承認されているものである。－あるいは、この領域におけるこの摂理の諸規定は、ただ偶然的で没理性的だとされるのだろうか。－精神的な偶然性、すなわち恣意が悪へ辿り着くとしても、悪であってもなお、星々の合法則的な振る舞いや植物の無邪気さよりもなお無限に高いものではないだろうか。

§194（§249）

自然は、諸階梯の体系として考察されねばならない。ある階梯は、他の階梯から必然的に生じてくるし、他の階梯のさしあたっての真理である。ある階梯が結果として他の階梯から生じてくるとしても、しかし、それは、ある階梯が他の階梯から自然に生じてくるのではなく、自然の根拠を成している内なる理念においてのことである。

ある自然の形式や領域のより高次の形式や領域への形成や移行を外面的に現実的な産出と見たが、しかし、現実的な産出をより明らかにするために、過去の暗闇へと戻してしまうのは、古い自然哲学と同様に最近の自然哲学の未熟な表象であった。自然にとっては、まさに相互を区別されたものに解体し、その区別をどうでもよい現存在として登場させるという外面性は、固有である。諸階梯を導く弁証法的な概念は、精神においてのみ現れ出てくる内なるものである。－かつて非常に好まれた目的論的考察は、たしかに、概念一般との関係とともに精神との関係をも根拠においていたが、しかし、外的な合目的性にのみ固執しており、－（§154）そして、有限な目的という意味や自然の目的に囚われた形で精神を考えていたのである。目的論的考察が自然の事物を有用なものとして示したのは、有限な目的のためだったのだが、その有限な目的のくだらなさのために、目的論的考察は、神の英知を指し示すというその信用を失っている。－自然の事物の有用性の考察は、自然の事物が即かつ対自的に絶対的な目的であるのではないという真理を自己内に持っている。しかし、この否定性は、自然の事物にとって外的であるのではなく、自然の事物の理念の内在的な契機である。この契機は、自然の事物の無常性ともう一つの現存在への移行を実現するが、しかし、同時により高い概念への移行を実現する。

§195（§251）

自然は、即自的には生ける全体である。さらに詳しく言えば、自然の階梯を進むことによる自然の理念の運動は、自然が即自的にそれであるものとして自分を措定することである。言い換えれば、同じことだが、生けるものとして存在するために、死であるその直接性と外面性から自己内へと戻ることである。しかし、さらにまた、理念が生命でしかないような理念のこの規定態を止揚し、自然の真理態である精神になることである。

§196（§252）

自然としての理念は、1）普遍的な、理念的な自己外存在として、つまり、空間と時間として存在している。2）実在的な相互外在として、つまり、特殊的な、あるいは物質的な定在として存在している。－これが非有機的自然である。3）生ける現実性とし

て存在している。これが有機的自然である。だから、三つの学は、数学、物理学、生理学と呼ばれうるのである。

第一部
数学

§　197（§254）

1）自然の最初の、あるいは、直接的な規定は、自然の自己外存在の抽象的普遍性である。すなわち、自然の自己外存在の没媒介的同等性、空間である。空間は、まったき観念的並存である。なぜならば、空間は、自己外存在であるのだから。そして、空間は、端的に連続的である。なぜならば、空間の相互外在は、なおまったき抽象であり、自己内にはなんの規定された区別もないのだから。

空間の本性については、以前からいろいろなことが言われてきた。ここでは、カントの規定①にのみ言及しよう。カントの規定によれば、空間は、時間と同様に、感性的直観の形式である。さらにまた、空間は単に表象における主観的なものにすぎないとみなされるべきだということを基本にすることが、一般的になってしまった。カントの概念のうちにある主観的観念論やその諸規定（§．5．注を参照）に属するものを無視すれば、残りは、正しい規定である。すなわち、空間は、単なる形式、すなわち、抽象であり、しかも、無媒介的な外面性であるということである。空間上の点について、それが空間の肯定的な要素を成しているかのごとくいうことは、許されない。というのは、空間は、その無区別性のため単なる可能態に過ぎず、否定的なものの被措定存在ではなく、したがって、端的に連続的なものであるのだから。だから、点は、むしろ、空間の否定である。空間の無限性に関する問いもまた、ここから解決される。空間は、一般に、純粋な量である（§．53以下）が、しかし、もはや、論理的な規定としてただの量であるのではなくて、無媒介的かつ外的に存在するものである。したがって、自然は、質でもって始まるのではなく、量でもって始まるのである。なぜならば、自然の規定は、論理的な存在のように、絶対的な始原、無媒介的なものではなく、本質的には、媒介されたもの、外的な存在、他在であるのだから。

①カント『純粋理性批判』「先験的原理論」の第一部「先験的感性論」参照

§　198

空間は、概念一般として（より規定的には、無関与な相互外在として）概念の区別を自分に即して持っている。a）この区別は、直接的には、空間の無関与性においては、単なる差異、すなわち、全く無規定的な三つの次元である。空間がちょうど三次元であるという必然性を演繹することは、幾何学に要求されるべきではない。幾何学は、哲学

的な学ではないし、その対象である空間を前提することが許されているのだから。もっと言えば、こうした必然性を明らかにするなんて思いもよらないことであろう。必然性というのは、概念の本性に基づいているのであるが、しかし、概念の諸規定は、この相互外在の最初の要素において、抽象的な量において叙述されるのだから、全く表面的にでしかありえず、全く空虚な区別である。だから、高さと長さ、幅を相互にどう区別するのかには、全く答えることができないのである。というのは、高さと長さ、幅はただ単に区別されているべきだということにすぎないのであって、何ら区別ではないのだから。高さというのは、地球の中心に向かう方向であるというより詳しい高さの規定がある。しかし、地球の中心などというのは、空間自体の本性になんの関係もない。地球の中心を無視してしまえば、なにを高さと呼ぼうが深さと呼ぼうがどうでもよいことである。それは、また、他の場合には、しばしば深さと呼ばれているものを長さと言ったり、幅と言ったりしてもどうでもよいのと同様である。

§　199（§256）

b）しかし、区別は、本来、規定された質的な区別である。そのようなものとして、区別は、α）まずもって、空間自身の否定である。なぜならば、空間は、無媒介的な区別のない自己外存在なのだから。この空間の否定が点である。β）しかし、否定は、空間の否定としてある。点の自分へのこの関係は、線、すなわち、点の最初の他在である。γ）しかし、他在の真理態は、否定の否定である。それゆえ、線は、面へと移行する。面は、一方で、線や点に対立している規定態であり、したがって、面一般であるが、しかし、他方、面は、空間の止揚された否定であり、したがって、今や否定的契機を自分に即して持つ空間の総体性の回復である。これが、包囲している表面であり、この表面は、個々の全体空間を分離する。

線が点から構成されているのでなく、面が線から構成されているのでないということは、これらの概念から生ずる。というのは、線は、点が自己外存在するものとしての点であり、空間に自分を関係付けるものとしての点であり、自分を止揚したものとしての点であるから。また、同様に、面は、線が自分の外に止揚されて存在するものとしての線であるから。――ここでは、点は、最初のもの、肯定的なものとして表象され、そこから始まるものとされた。しかし、逆に、空間が肯定的なものであるかぎり、同様に、面が最初の否定となり、線が第二の否定となるが、しかし、この第二の否定は、その真理態からすれば自分を自分に関係づける否定であり、これが点ということになる。この場合でも、移行の必然性は同じである。――空間のもっと様々な形状を幾何学は考察するが、そういった形状は、空間の一つの抽象である面のさらに質的に制限されたものであり、また、制限された全体空間の質的に制限されたものである。幾何学において、必

然性の契機が現れ出てくることはほとんどない。たとえば、三角形は最初の直線図形であるとか、他のすべての直線図形は、これを規定しようと思えば、三角形か四角形に還元しなくてはならないとかというようにである。――こうした様々な作図の原理は、悟性的な同一性であり、悟性的な同一性は、様々な図形の形状を合法則性へと規定し、そうすることで様々な比関係を基礎付け、投入する。この比関係を認識することがこの学の目的である。――ちなみに、カントは、直線の定義について奇妙なことを思いつき、主張している。つまり、直線は二点間の最短距離であるという直線の定義は、総合命題だと主張しているのである。
その理由は、直という私の概念は、大きさについては何も含んでおらず、ただ質のみを含んでいるということである。①――こういう意味でなら、どの定義も総合命題である。直線という定義の対象は、まずは直観、あるいは、表象なのであって、直線は、二点間の最短距離であるという規定がはじめに概念を構成している（ここでいう概念は、このような定義に現れてくるような概念である。§　110参照）。概念というものが直観のうちにすでにあるのではないということがまさに直観と概念を区別するのであり、定義というものを要求するのである。単なる表象には、或るものは、質として現れるのだが、その特別さは、量的な規定に基づいているというのは、きわめて単純なことであり、たとえば、直角や角度の場合もそうである。

①カント『純粋理性批判』B16

§　200（§257）

2）否定性は、点として空間に関係し、空間において自分の規定を線や面として展開するのだが、しかし、自己外存在の領域においては、対自的に、そして、静止した並立に対して無関与なものとして現れてもいる。このように対自的に措定されたならば、否定性は、時間である。

§　201（§258）

時間は、自己外存在の否定的な統一であるとともに、端的に抽象的で観念的な存在である。つまり、存在するとき、存在せず、存在しないとき、存在する存在である。
時間は、空間と同様に、感性、または、直観の純粋な形式であるが、――しかし、時間も、空間と同様、客観性と客観性に対立する主観的な意識との区別には無関係である。こうした規定を空間や時間に適用すれば、空間は、抽象的な客観性であるが、しかし、時間は、抽象的な主観性である。時間は、純粋な自己意識の我＝我と同じ原理である。しかし、この原理、あるいは、単純な概念は、まだ、完全な外面性のうちにある。つま

り、この原理は、直観された単なる成であり、純粋な自己内存在であるとともに、そのまま、自己外出である。――時間は、空間と同様に、連続的である。というのは、時間は、抽象的な、自己に関係している否定性であり、こうした抽象においては、未だ、なんの実在的な区別もないのだから。――時間において、あらゆるものが生起し消滅すると言われる。というのは、時間は、まさに、生起や消滅の抽象そのものなのだからである。あらゆるもの、すなわち、時間を満たしているものと空間を満たしているものすべてを捨象すれば、空虚な時間と空虚な空間が残ると言うのである。――つまり、この立場からすれば、外面性というこうした抽象が措定されるのである。――しかし、時間そのものは、こうした成であり、こうした存在している捨象作用であり、あらゆるものを生み出し、その生み出されたものを破壊してしまうクロノスである。――しかし、実在的なものは、時間と区別されはするが、時間と同一である。ものはみなすべてうつろう。この意味で、あらゆるものが時間的なものなのであり、あらゆるものが時間のなかにのみあるのである。つまり、概念のように自己自身に即して純粋な否定性であるといったものではなくて、たしかに、純粋な否定性を自分の普遍的な本質として自己内に持ってはいるが、しかし、この本質に絶対的には適合しないのであり、だから、自分の威力としての否定性に関係するものである。時間そのものは、永遠である。というのは、時間そのものは、ある瞬間の時間のことではないし、今のことでもなくて、時間としての時間は、時間の概念のことであるのだから。しかし、我＝我という自己同一性におけるこの時間の概念は、即かつ対自的に、絶対的な否定性と自由である。だから、時間は、概念の威力でもないし、時間の概念は、時間のうちにあるものでもなければ、ある時間的なものでもない。むしろ、時間の概念は、時間の威力であり、時間は、外面性としての時間の否定性にすぎないのである。――したがって、自然的なものは、時間に従属している。それは、自然的なものが有限であるという意味でであるが。これに対して、真なるもの、すなわち、理念、精神は、永遠である。したがって、永遠性の概念は、永遠性とは止揚された時間であるというように理解されてはいけない。また、永遠性を時間に向かっていくかのもののごとくに解して、永遠性を未来としてしまい、時間の一契機にしてしまってもいけない。また、時間を全く否定してしまい、永遠性とは、単なる時間を捨象したものにすぎないと解してもいけない。その概念にある時間は、概念自身と同じように、永遠なものであり、それゆえ、また、絶対的な現在である。

§　202（§259）

現在、未来、過去という時間の三次元は、無へ移行するものとしての存在と、存在へ移行するものとしての無の区別にいたる成とその解消にすぎない。この区別の個別態への消滅は、今としての現在である。つまり、今としての現在とは、自ら、存在が無へと、

無が存在へと消滅することにすぎない。

1）有限な現在が永遠な現在と区別されるのは、有限な現在が今としてあり、それゆえ、過去や未来という抽象的な現在の契機が具体的な個別態である有限な現在と区別されることによるのである。しかし、概念としての永遠性は、自分自身のなかに過去や未来という契機を含んでいる。だから、概念としての永遠性の具体的な個別態は、今ではない。

なぜならば、概念としての永遠性は、静かな同一性であり、普遍的なものとしての具体的な存在なのであって、成のように無へと消滅するものではない。――それはそうと、時間が今である自然においては、かの時間の三次元の区別を存立するに至らない。これらの次元は、主観的な表象、記憶とか恐怖、希望においてのみ必然である。しかし、時間における抽象的な過去や未来は、止揚された空間がまずもって点であり、時間であるように、空間である。

2）有限な、空間についての学、幾何学とは、時間に関する同じような学は、直接対応しない。なぜならば、時間の区別は、空間の直接の規定態を成している自己外存在のこうした無関与性を持っておらず、したがって、空間とは異なり、形状化には適さないからである。時間の原理が形状化が可能なところに達するのは、時間の原理が麻痺させられ、時間の否定性が悟性によって一へと引き下げられることによってである。直観は、ここでも以前と同様に単にそれだけの悟性よりも高い相対的な真理を含んでいる。なぜなら悟性は抽象的なだけであるが、直観は具体的だからである。――この死せる一、今や思想の最高の外面性は、外的な結合が可能であり、こうした結合は、算術の形状化であり、相等性と不等性の、つまり、同一化と区別の悟性規定が可能である。したがって、幾何学に対し、一を原理に持つ学は、対立している。――3）ところで、数学という名称は、以前は、空間と時間の哲学的な考察にも必要とされていた。なぜならば、数学は、その諸対象にそくしてまたその諸対象によって大きさ規定のみを考察するにもかかわらず、数学という名称は、哲学的考察に少なくとももっとも近くにあるからである。また、数学は、時間そのものを考察するのではなく、一つのものをその諸形状と諸結合において考察するということが想起される。――運動学においては、時間は、たしかに、この学の対象となりはする。しかし、応用数学は、一般に、内在的な学ではない。それは、まさに、応用数学が所与の素材と経験から受け取る諸規定への純粋数学の応用であるからである。――

4）しかし、哲学的数学なるものを考え、普通の数学的な悟性学が前提された諸規定から概念をもたない悟性の方法によって導き出すものを概念から認識しうるのではないかと思う人もいるだろう。しかし、数学があくまでも有限な量規定の学であって、みずからの有限性のうちに留まり、有限性に妥当しなければならず、移行してはならないのだから、数学は、本質的に悟性の学である。そして、数学は、完璧に悟性の学たりうる

能力をもっているのだから、数学がこの種のほかの学にたいしてもっている長所は、数学にとっては、むしろ維持されるべきであり、数学とは異なる概念や経験的な目的の混入によって汚染されてはならない。そうしても、依然として未解決なのは、概念が算術の演算や幾何学の命題において指導的な悟性原理と秩序やその必然性を、すでに示したようにより徹底的に自覚させようということなのである。――空間や一の形状を哲学的に取り扱おうとすれば、その形状は、上述の根拠からその固有の意味を失い、こうした哲学があるとすれば、それは、諸概念に具体的な意味を与えるにしたがって、論理的なものか、あるいは、別の具体的な哲学的な学のようなものかになるだろう。――しかし、きわめて余分で無駄な徒労だろうと思われるのは、思想を表現するのに図形や数のような融通のきかない不十分な媒体を使おうとすることであり、こうしたものをこの目的のために暴力的に取り扱おうとすることである。こうした図形や数にとっては、一定の概念は、そのたびに、外的に付着したものであるのだから。最初の単純な図形や数は、任意に、思想にとっては従属的で、つまらない表現ではあるが、象徴に適用されることができる。純粋に思惟しようという最初の試みは、こうした緊急手段に出たのである。つまり、ピュタゴラスの数の体系は、その著名な例である。しかし、より一層豊かな概念の場合には、こういう手段はまったく不十分である。というのは、こうした手段は、外的な複合であり、結合が一般に偶然的であり、概念の本性にふさわしいものではないからであり、また、複合された数や図形のうちで可能な多くの関係のうちでどの関係が保持されるべきかがまったく曖昧になるからである。いずれにしても、それぞれの規定が相互に無関与な外的なものに陥るこうした外的な媒体においては、概念の流れが飛散してしまう。かような曖昧さが克服されるのは、説明によるしかありえない。とすれば、思想の本質的な表現は、この説明であり、かの象徴化は、中身のない余計なものである。――無限、その比、無限小、因数、べきなどの他の数学上の規定は、その真の概念を哲学自体のうちにもっている。こうした規定を哲学のために数学から取ってきて借用しようとするのは、うまくない。数学では、これらの規定が没概念的に、それどころかしばしば無意味に扱われており、これらの規定を訂正したり意義づけたりすることは、むしろ、哲学に期待されねばならないのである。量論としての数学の真の哲学的学は、度量の学であるはずある。しかし、この学は、すでに、具体的な自然のなかにはじめて現存している事物の実在的な特殊性を前提している。

§　203（§260,261）

3）空間と時間は、即かつ対自的に理念をなしている。前者は、実在的な側面、あるいは、直接的に客観的な側面であり、後者は、純粋に主観的な側面である。空間は、自分自身において、無関与な相互外在と区別のない連続性との矛盾である。したがって、

自分自身の純粋な否定性であり、時間への移行である。――空間は、自己を場所の個別態となす。同様に時間も、時間の、ひとつにまとまっていながら対立している諸契機が直接的に止揚されているのだから、無差別への直接的な崩壊であり、区別のない相互外在への、すなわち、空間への直接的な崩壊である。したがって、この場所は、ちょうどここで、自分の規定態に端的に無関与なものとして直接的に他の場所となる。時間における空間の、空間における時間のこうした消滅と再発生が運動である。――つまり、運動は、成であるが、しかし、この成は、みずから同様に直接的に、同一的で定在している時間と空間の統一、すなわち、物質である。

観念性から実在性への移行、抽象から具体的な定存在への移行、ここでは空間と時間からの、物質として現象している実在性への移行は、悟性には理解不能のものなので、悟性には、つねに外的で、所与のものとなってしまう。よく知られた表象では、空間と時間は、空虚なもので、外部から物質で満たされるのだとされており、一方では、こうして物質的な事物を空間と時間にたいして無関与なものとしておきながら、もう一方では、同時に本質的に空間的で時間的なものとしているのである。――物質についてふつう言われていることは、α）物質は複合されているということである。――これは、物質の空間との同一性に関連している。――物質において時間や一般にすべての形式を捨象した上で、物質について、物質は永遠で不変であると主張されてきた。この主張は、実際、直接的に帰結する。しかし、このような物質は、また、非真理である抽象概念にすぎない。β）物質は、不可入的であり、抵抗をなし遂げ、知覚できるもので可視的なものであるなどなどと言われる。これらの述語が言わんとするのは、物質が一方では規定された知覚にたいして、一般に他者にたいして存在するが、しかし、もう一方で同じく対自的に存在するということである。この二つのことは、物質がまさに、空間と時間の同一性として、直接的な相互外在と否定性あるいは成の同一性としてもっている規定である。――しかし、観念性から実在性への移行は、もっともよく知られた力学的な現象においても形式的には現れるのである。すなわち、観念性が実在性の代理をすることができるし、またその逆もありうるのである。

観念性と実在性の両者が交換可能であることからこの両者の同一性を見抜けないのは、表象や悟性の毎度の無思想性のゆえにすぎない。たとえば、てこの場合は、質量が距離の代わりになりうるし、また、逆も可能である。観念的な契機の一定量は、対応している実在するものと同じ作用をもたらす。――運動量の場合も同じく、空間と時間の量的な関係である速度が質量に代わりうるし、逆に、質量が増大し、それに比例して速度が減少する場合でも、もたらされる実在の作用は同じである。――一個のれんがはそれだけで人間を打ち殺すのではなくて、それに足るだけの速度によってのみ、こうした作用はもたらされるのである。すなわち、人間は、空間と時間によって打ち殺されるのである。――力の反省規定というのは、ここでは、ひとたび悟性にとって固定された、

最後のものであり、それゆえ、力の反省規定は、悟性が概念にしたがってさらに問うことはおしとどめ、これを余分なこととみなしてしまうのである。しかし少なくとも、悟性の念頭には、没思想的にではあるが、力の作用が実在的なものであり、はっきりと感知できるものであるということ、力のなかに力の外化のなかにあるものがあり、力は、まさに、観念的な契機の、つまり、空間と時間の相関によって力の外化であるこうした力を獲得するということである。――そのほかにもこうした没概念的な反省に属するのは、いわゆるもろもろの力を物質に植え付けられたものと、物質にとってもともと外的なものとみなし、その結果、まさに、力の反省規定の際には念頭にあった、本当は物質の本性をなしている時間と空間の同一性が物質に無縁で偶然的なものとされることである。